



地区大会セミナー

「障害者アートで社会を変える」



一般財団法人 たんぼぼの家 理事長

播磨 靖夫

プロフィール

1942年 生まれ、兵庫県宝塚市出身
 1964年 4月 毎日新聞社 記者
 1974年 1月 フリージャーナリスト
 1980年 5月
 財団法人たんぼぼの家理事長（～現在）
 1987年 7月
 社会福祉法人わたぼうしの会 理事長（～現在）
 1994年 6月
 日本障害者芸術文化協会（エイブル・アート・ジャパン）常務理事（～2011年3月）
 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン 理事（2011年4月～現在）
 1996年 11月
 日本NPOセンター代表理事（～1999年6月）
 1999年 6月
 特定非営利活動法人日本NPOセンター 副代表理事（2004年6月）
 2004年 6月 同 代表理事（～2008年6月）
 2008年 6月 同 理事（～2012年6月）
 2012年 6月 同 顧問（～現在）
 1999年 12月
 日本ボランティア学会 副代表（～現在）
 2000年 9月
 芸術とヘルスケア協会 代表理事（～2006年3月）
 2006年 3月
 アートミーツケア学会 常務理事（～現在）

本日は、私が今まで行ってきたこと、これから成すべきことについて、皆さんと共有したいと思います。私は奈良にある「たんぼぼの家」の理事長として、アートとケアを両輪とした事業を行っています。アートもケアも人間を人間たらしめる営みです。また私は35歳の頃に財団法人を作って、理事長として長年NPOの活動をしてきましたので、NPOのあり方についてアドバイスをしたり、若い人を励ましたりしてきました。

ロータリーの皆様とNPOとは大いに関係があるというところから、今日は「与えられる人から与える人へアートは障害者をどうかえたか」というテーマでお話したいと思います。まず、私は日本にNPOをつくるためにいろいろと奔走してきました。1995年に阪神淡路大震災が起きました。その時支援に入ったボランティアの力がものすごく大きかったので、日本でもボランティアセクターを大きくしていこうという動きが起こりました。1996年にアメリカ社会がどのようにしてNPOを活かしているかを、アメリカへ調査に行きました。その時、経団連の社会貢献の組織「ワンパーセントクラブ」の皆さんと一緒に合同調査団を作り、アメリカの財団やNPO組織、政府機関を回って調査しました。そのような経緯があり、日本NPOセンターを作り、初代の代表理事をさせていただき、日本国内にNPOを作り普及させる仕事を行ってきました。

“なぜ、アメリカ社会にNPOが生まれたのか？”ということに興味を持ち、アメリカの歴史を調べました。アメリカの資本主義社会の原点は、“働きなさい”、“稼ぎなさい”そして“与えなさい”が基本です。この原点との出会いが、日本にNPOを普及させる際に非常に大きな意味を持ちました。ドイツの社会・経済学者のマックス・ウェーバーは資本主義が発達しているアメリカを調査して、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本を書きました。大変厚い本ですが、簡単に言えば“働きなさい、稼ぎなさい、与えなさい”の言葉に尽きるわけです。“働きなさい、稼ぎなさい”はわかると思いますが、“与えなさい”は何かと言いますと、寄付文化なんです。この文化をアメリカ社会は持っており、その中でロータリーが生まれました。100年を超える歴史のあるロータリーが生まれ、社会貢献を行うわけです。

日本はどうかと言いますと、“働きなさい”を行ってきて高度成

長を遂げ、以前は世界で2番目の経済的に豊かな国になりましたが、“与えなさい”という文化は築けなかった。寄付文化が日本ではまだ成熟していないため、現在、日本のNPOが大変苦労しています。しかしながら、ロータリーの皆さんは日本での寄付文化の担い手として活躍されてきたことは、大変敬意に値することです。日本は今、多くのNPOができました。大変な状況のNPOもありますが、日本も成熟した社会に向かっていることは確かです。

それでは、本題の障害者アートについて話したいと思います。山下清さんは大変有名な方ですが、彼は特異な天才であると位置づけられてきました。作品はたくさん残っていますが、彼の展覧会は美術館では開かれず、美術雑誌や専門雑誌も扱いませんでした。なぜかと言いますと、美術の専門家が考えているアートとは違う分野の人だった、ということです。ちなみに山下清展は百貨店の催事場で盛んに開かれました。

私が障害者アートと出会ったのは40年前で、四国の高松で新聞記者をしていました。知り合った美術評論家の方に、現代アートについて教えていただきました。その方から「知的障害者の施設で絵画教室をしているんですよ。一度見に来て下さい」と誘われ、取材を兼ねて見学に行きました。見たとたん「子どもの絵ではないな」と思い、美術的な才能に驚きました。1960年代、私が大学生の頃、岡本太郎氏が“今日の芸術”というベストセラーの本を出しています。その本の中で「今日の芸術は、上手くあってはならない。綺麗であってはならない。心地よくあってはならない」という今までの芸術観がひっくり返るような宣言をしました。これには賛否両論ありましたが、今振り返ればこの芸術宣言は当たっており、現代アートの状況はそうようになってきています。

私は高松支局から奈良支局に転勤になりました。その頃、日本は高度成長を遂げたけれども、そこから忘れられた人たちがいることに気づき、障害者のキャンペーンを1年間行いました。養護学校や支援学級を取材した時、大変いい絵が埃をかぶっている

のに気が付きました。障害者キャンペーンが終わった翌年、それらの作品を一人で集めて、障害者作品展を奈良県文化会館で開催しました。必ずしも周囲の人たちからは、いいとは言われませんでした。特に障害のある人の親からは、「障害者の子どもの幼稚な絵を出したら、障害者のイメージが悪くなる」と言われました。でも決して幼稚な絵ではないと、議論した記憶があります。

阪神淡路大震災が起こった1995年に、“エイブルアートムーブメント”（可能性の芸術運動）というのを提唱しました。今まであるものを絶対視せず、別様でもありうるという「可能性感覚」に基づいた芸術運動です。それまで障害者アートは評価されていませんでしたので、新しい視点で障害者アートを見直していこうと呼びかけました。その目的は、「アートを通して障害のある人たちの能力を高めると同時に、社会的イメージを高める」ことです。そしてこの運動をトヨタ自動車株式会社がバックアップしてくれました。7年間、全国各地で“トヨタ・エイブルアート・フォーラム”を開催していただきました。そして2005年に、“アートセンターHANA”をたんぼぼの家の敷地内に建てました。人生は、出来ないことを悔やむよりも出来ることに集中することが大事です。出来ることに集中できる環境を整えれば、どのようなことが起こるか、社会的実験を行ってみようということで、障害のある人たちがここでアート活動を始めました。たんぼぼメンバーの一人、山野将君は、絵を描きだしたとたんに、すごい集中力を発揮しました。人間関係もどんどん豊かになり、自分の世界が変わっていきました。彼が有名になったきっかけは、かつて日本テレビで徳光和夫さんが出ていた“ザ・サンデー”という番組で、彼の作品がスタジオオブジェに選ばれたことです。カラフルで大きな花の絵が飾られています。

たんぼぼの家には現在、50人以上の障害のある人たちが来られています。それまで養護学校や支援学級でしかアートの経験がないはずなのに、たんぼぼに来たとたんにそれぞれに自分の表現をはじめ



るわけです。これはどういうことでしょうか。私は、芸術の才能は天からの贈り物ではないかと思っています。「もらった才能は環境さえ整えば開花していく」ということを、アートセンターHANAで実践しているのです。天からの贈り物を通して、いろんな表現をすること、すなわち「天職」です。英語ではVOCAATIONやCALLINGで、天からの声に添えて表現することです。贈り物には必ずお返しをしなければならぬ義務があります。彼らは天から頂いた才能で、表現活動を通して素晴らしい作品を作り、人々を癒し元気づけたりして、関わる人たちの生活を豊かにしていくということが起こっています。大阪難波にある高島屋が増改築した時に新しく“ギャラリーNEXT”という現代美術の画廊ができ、そのこけら落としに新進作家として山野君の個展が開催されました。

その山野君の元へ、紙おむつや手術キットを製造しているリブドゥコーポレーションから依頼がきました。新居浜に新しく工場を作ったのですが、塵など一切不可の環境での作業は大変でストレスも感じます。社長が、何か良い方法はないかと考えた時に、“障害者アートは人間性を回復する力がある”ということを知り、ぜひ山野君にと声がかかりまし

た。今では工場の玄関に彼の大きな壁画が飾られています。このように障害のある人の絵が、人々を勇気づけたり元気づけたりしているのです。これはまさに、天からの贈り物に対して、アーティストとしてお返しをしているということです。

さて、障害者アートはどうしてみたらよいのか？皆さんが絵画を買われる時は、ランクがあり何号でいくらという相場があるかと思いますが、障害者アートはそういった観点ではみれません。そもそもアートとは起源をたどっていけば、何かに取りつき、そのものの心になって世界を見つめなおすということから始まりました。見えているものをデフォルメしたり、見えないものを形にしたりすることによって表現されます。私たちが持っている合理性とか固まった見方を解き放って、生命力を発揮して共有する場をつくるのがアートの役割です。いい芸術作品を観ると感動したり、時には涙するほど感激したりして、心が打たれると言われます。なぜ心が打たれるのか？いい作品には心があり、その心に自分の心が共震することが感動の源ではないかと思っています。皆さんもカラオケで演歌を歌われると思いますが、なぜ演歌は日本人の心を掴むのでしょうか。昨年の大みそかのNHK紅白歌合戦で島津亜矢さんが「帰らん

ちゃよか」を歌いました。これは熊本弁で「帰らなくてもいいよ」という意味です。本当は帰ってきてほしいという思いを込めて、「帰らなくてもいいよ」と子どもたちにエールを送る親心です。島津さん自身も故郷を離れて歌手の道を選んだので、歌の歌詞が身に染みて感じていて、それが見事に表現されていました。和歌山でも子どもさんが故郷を離れているケースが多いと思いますが、親御さんにしてみれば、できれば子どもに帰ってきてほしいという思いは、皆持っているのではないのでしょうか。ですから「帰らんちゃよか」の歌の心が、我々の心と共震し感動するわけです。これは歌だけでなく、アートもそうなんです。優れた芸術は心がこもっていますので、心で観ると共震して感動するんです。障害者の作品展でも、その作品を観て涙を流す人もいます。

現在、我々は高度成長を遂げて豊かになったという思いがありますが、このまま経済成長を続けていけばどうなるのか？資源の問題もあります。今までの右肩上がりの状況ではなくて、日本は成熟社会に向かっていると、私は常々言っています。成熟社会の定義はいろいろありますが、まずは一人ひとりが自己実現をはかって幸福になっていくと同時に、他人の自己実現にも敬意をはらって尊重する社会です。これを実際にアクションを起こしているのが、コミュニティアートです。アートとは美術館やギャラリー、劇場にあるものと皆思っていますが、生活とアートが近づくのがこれからの時代です。アートは美術館の専有物ではありません。2011年、和歌山NPOセンターの協力を得て、“ひと・アート・まち”という、美園商店街をアートで飾るプロジェクトを実施しました。このプロジェクトは近畿労働金庫がスポンサーとなり、近畿2府4県を毎年巡回して開催しています。これまで和歌山では、じゃんじゃん横丁と美園商店街と2回行っており、2016年は和歌山市と田辺市で行う予定と聞いています。アートが人の心と心をつなぐ架け橋になります。こういったコミュニティアートのプロジェクトが全国各地で開かれており、アートが非常に大切な役割を果たしています。

“プライベート美術館”は、地域のお店の店主を「お見合い展示会」に招待し、そこで展示している障害者アート作品を自分の感性で選んで、プライベートな空間、すなわち自分のお店に飾るといったプロジェクトです。あるお茶屋を営む老夫婦は、カラフルな人物画を選んでお店に飾ったら、大変評判が良かったそうです。プロジェクトに合わせて、どのお店にどのようなアートが飾っているかが掲載されているマップを配布していますが、それを見ながら散策する観光客が増えてきているようです。

福祉施設の職員のなかには「アートなんか何の意味もない」と思っている人もいます。我々はアートの社会的な役割や意味を求めていった結果、今度はアートを仕事にしていくプロジェクトをやろうと“Good Job!プロジェクト”をはじめました。障害のある人たちは、仕事の選択肢が少ない上に所得が低いために、働きがいや生きがいを感じにくい、という社会的な課題があります。誇りを持って仕事ができるようにするためには新しい発想が必要です。そこで、アートにデザインを加えて付加価値の高い作品やプロダクトを作り、これをビジネスにしていこう、ということに取り組んでいます。奈良県では靴下の製造会社、Tabioさんが障害者アートの作品を見て、靴下のデザインに取り入れ、製造販売をしています。それが若い人に受けており、シーズンごとに発表する靴下はほぼ完売しているそうです。また、ココヨ株式会社さんと一緒に家具や手帳を開発するなど、企業との協働が増えてきています。

今まで企業は、社会貢献・社会的責任を強調されましたが、今はCSV（CREATING SHARED VALUE），“共有する価値を一緒に作りましょう”というふうに変わってきました。新しい発想で物作りをし、商品化していこうというものです。日本では企業の社会貢献が大きく変わろうとしているように感じています。NHKの番組で、300年続いている奈良の中川政七商店が、東京丸の内などに雑貨類を扱う新店舗を出しているのが放送されました。ここでもコラボ商品の開発を共同で行っています。

そして今度は、物づくりの意識を変える、Good

Job!センターの建設に入っており、9月に完成予定です。たまたま奈良県香芝市の土地の持ち主が、市街地のいい場所にある土地を提供してくれたのがきっかけです。お手元のパンフレットには、山野君が描いた富士山の絵が載っています。山野君以外にも全国でアーティスト、作家として独立して活躍している人がたくさんいます。

ここでぜひ言っておきたいことがあります。障害のある人たちと長年活動してきて感じることは、我々は“障害のある人は自分を障害者だと思っている”と信じていましたが、実は思っていないんです。

“障害のある人は自分を人間と思っている”のです。我々は、障害者に手を差し伸べた結果、彼らを“与えられる人”にしてしまったのです。でも彼らは“与える人”に変わっていくことができます。そこにアートやデザインの役割があります。

あえてロータリーの皆さんに言うのは野暮ですが、「高い収入や名声を人生の目標とする人は、幸福度がダウンしていく」という例があります。「自分が成功するために、他人を踏みにじったりして前進してはいけない。自分の必要なことだけで、他人に無関心であってはいけない」ということは、皆さんは重々わかっていることだと思います。我々はもう一度、“与える”ということの意味合いを考えていく必要があります。

最後になりますが、40年活動してきて今、感じるがあります。子どもの時に視覚障害・聴覚障害になったヘレン・ケラーは、人間が人間たらしめることの大事さを説いて、多くの人に影響を与えました。彼女は「私は大きな意味のある崇高な仕事をしたいと、強く望んでいます。でも私の最も重要な務めは、些細なことを大きな意味のある崇高なことのようにやり遂げることなのです」という言葉を残しています。先ほどお話しましたように、障害のある人がアート活動をするということについて、多くの、特に福祉関係の人は最初は無関心でした。そんななかで長い間やってきましたが、仕事を通して障害のある人たちからいろんなものを学んだ結果、平成21年にアマチュアで初めて芸術選奨文部科学大臣賞をいただきました。その時、一緒にいただいたのは坂本龍一さんなどです。このような活動の結果、賞をいただけたのだと思っております。本日はありがとうございました。